ばあさのモチナ

びん、びん、びん、びゅーん。

月の明かるい夜になると、この池の中から糸つむぎの音が聞こえるようになったのは、それからのことでした。そして、だれいうとなくこの池を〝つもが池〟と呼ぶようになったのです。

奥村幸子

ばあさのモチナ

むかし、美濃の池田村に、ひとのええばあさが住んでおった。

以前は、かなりの田畑を持っておったが、ひとにたのまれるたび、いやとはよう言わずあっちの畑、こっちの田んぼと借すうち、とうとうばあさの手もとには、山の開墾畑が一枚きりになっておったと。

それでもばあさは、だれをうらむわけでなく、ネコのひたいほどのその開墾畑に、モチナだの、カブラだのを作ってくらしておった。

ある年もおしつまった日、ばあさは急に用を思い立って、よそ村まで出かけた。半道ほど来たとき、朝から今にも降りそうだった空から、白いものがまいはじめた。

「ありゃ、とうとう降り出しちまったわい。いまに積もりでもすりゃ、足もとがあぶのてもどって来れんよになるかも知れんぞ。」

ばあさがひとりごとを言って、にぶい空を見上げたとき、なにやらシャッとかたのあたりを通りぬけて行った。

「ありゃ、おまけに風まで出てきたようじゃ。」

ばあさは首をすくめて胸元をかき合わせ、もどろか、行こか迷って、もと来た方をひょいと向

いた。

すると、今の今まで、たしかにひとのおらなんだ道ぐろの畑で、だれやらせっせとモチナをぬきよる。

「おまえさま、今までわしゃ気づかなんだが、この寒いのに、ごくろうさまなことよ。それにしても、そんなやせたモチナじゃなんやで、近けりゃわしの畑でとってきてあげるに。」

ばあさは、思わず声をかけた。ところがどうしたことやらそのひとはふり向きもせず、モチナをぬきよる。よう見や、色がぬけるよに白て、細面の美しい、ここらあたりのひゃくしょうのよめごとは見えん。ばあさは、

「こりゃ、声をかけたりして悪かったわい。おおかた通りすがりのおひとが、ひとつまみふたつまみ、だまってもらっていかっせるところやったに、それをわしはおっちょこちょいやもんやで、ひとさまさえ見や、つい声がかけとうなって。それにしてもこんなやせたモチナより、わしの畑のモチナのほうがよっぽどこえとるに。ひと走り行ってぬいてきてあげましょ。」

と、もう用など忘れてしまって、自分の畑へ向かって、くっく、くっくと歩きはじめた。

「おまえさまあ。ちょっと待っとらっせれよ、モチナとってきてあげるに。」

ばあさの声は、雪風にふかれていった。

ばあさが、白い息をはきはき、山の畑へ来てみると、これはまたどうしたことか、たしかにきのうまで、いくうねも青々とようできとったモチナがひと葉もない。

ばあさはたまげて、あんまり急いで来たもんで、こりゃ、よそさまの畑とまちがえておるかいなと、あたりを見まわした。たしかに目じるしのせんぼろガキの木もあるしその下にはちゃんとこやし溜もある。

「やっぱしわしの畑にまちがいないわい。それにしてもこりゃいったいどうしたことよ」

ばあさは曲がったこしをよけいかがめて、うっすらと雪のかかった畑を見た。するとところどころにいかにもえんりょしいしい、小さなウメの花のような足あとがある。

「ありゃ、するとあのときのおひとは、池田稲荷のおキツネさまじゃったろか。そういやぁあの首すじの細かったこと。そうよ、そうにちがいない。それにしてもありがたいことよ、後家のばあさが作ったやせ畑のモチナを、ようおキツネさまはもらっておくれた」

ばあさは、正月ににる自分のぞうにのモチナがのうなったのも忘れて、もったいない、ありがたいと喜んだ。そして、

「お礼参りに行かにゃ。それにおキツネさまも菜っぱばっかしじゃおきのどく。ヒエとアワばっかの餅でもしんぜてこにゃ」

そう言って家へもどると、ゆうべひと晩かかって豆ひいて、ナタネ油であげてこさえたあぶらげを餅にそえ、お稲荷さまへ出かけて行った。

お元日の朝は、ゆうべまでの雪も止んでいた。

ばあさは、井戸端へ出て初日の出をおがみ、若水を汲んでモチナのないぞう煮で正月を祝った。

「ありがたいことよ。今年もこうして、まめでとしが拾えた」

働きもののばあさは、台所にぶらさげてあったためかごから種をひとつまみ紙にひねってふところへ入れ、鍬をかついで外へ出た。

「一日でも二日でも、畑を遊ばせといちゃばちがあたる。ハルナでもまいとかにゃ」

ばあさがそう言いながら山の畑へ来てみると、ハクサイだの、ニンジンだの、ダイコンだの、それにナガイモまでが、銀色に光る雪の中に、いくうねもいくうねも並んでおった。

それからというもの、モチナやカブラしかできたことのなかったばあさの畑は、なにをまいても一年じゅうようできたと。

松井文子